

## 総合討論<sup>1</sup>

パネリスト

菅原 潤

岡村 康夫

永井 晋

小野 純一

司会

長島 隆

**長島** それでは、それぞれ発表していただいた方々から、簡単に、話し足りなかった、あるいは他の先生の報告を聞いて、もうちょっと付け加えてみたいということがありましたらば、それぞれ菅原先生からずっと順に、それぞれ5分程度で付け加えていただきたいなと思います。で、あと一つだけちょっと断っておきますが、現在東洋大学では、この国際哲学研究センターと並んで、TIEPh、エコフィロソフィーというプロジェクトも走っておりまして、実を言うと先ほど、この TIEPh の中心になっておる河本英夫先生が、こちらのシンポジウムにも話を聞きに来られておられました。まだエコソフィーのほうもこちらと同時並行的にやってる最中なので、シンポジストの方々の話を聞いた段階で、途中下車してあちらのほうに戻ってったということがございます。そういうこともあります。このシンポジウムはそれだけ関心の高いシンポジウムであります。ですから、ぜひこちらも活発にディスカッションを進めていきたいと思っています。それでは、菅原さんよろしく申し上げます。

**菅原** はい。そうですね、ちょっと言いかけて、言いよんだところがあったんですが、自由論のところでの愛の話なんですが、これは、ウングルント (Ungrund: 無底) が愛といえますか、いわゆる、命題的存在の中で、その収縮力と拡張力が、一応落ち着いたような状態で A と B が共存するというような形。それが無底としての愛であるというような話があります。で、その愛と、あといわゆる拡張力のほうでいくのも、まあちょっと愛っていうふうな話をし

---

<sup>1</sup> 以下は 2014 年 2 月 22 日に行われた東洋大学国際哲学研究センター主催シンポジウム「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」での総合討論をもとにしたものである。

## 総合討論

ているんですが、これはベクトルが逆なんですよ。拡張力のほうですと、いわゆる俗に言うエロスの何かを求めるほうなんですけど、無底としての愛のほうは、そうじゃないです。で、ひょっとしたらこれが、まあアガペー (agape:愛) とかとも、関わる話なのかなあという気がしました。というのは、後の、永井先生と、その小野先生のほうの話での、いわゆるシェリングの違いを際立たせるために、ちょっといわゆるこの、破裂というか、器を吹き飛ばすというような話の絡みで、拡張力の話が出ていたのですが、そのことも愛と絡げるところがあるんじゃないかなという気もしたものでしたので、ちょっとそこのところを、考えました。で、あとですね、これは、質疑とかでも関わるかもしれないんですが、とりあえず Weltalter のほうでは、その、子供をつくるという中で二つ、二力の均衡関係でつくる。それが、いわば、言葉というものとしてあるんですが、これ永井先生の話でも出たのが、いわゆる飛び散ったものから語があって、それを解釈するという話。これはだいたい、言葉のイメージがたぶん違うなって感じがありまして、シェリングであれば、それは、受肉であり、永井先生の話であると、それは、解釈される語であるというような形で、で、このあたりが、シェリングの話だと、何とか啓示の話と、あるいは、エクスターゼ (Ekstase:脱我) の話とつながらないかなっていうことを、考えながら聞いてたってというようなことでした。で、その関係で、愛の話に二通りあるっていうことを、ちょっと付け加えさせていただきます。以上です。

**長島** はい。続きまして、岡村さんです。

**岡村** はい。私がシェリングを読み始めた動機は、大学院の時に武内義範先生がヘーゲルを読んでおられて、そのヘーゲルのディアレクティーク (Dialektik:弁証法) とかスペクラツィオン (Spekulation:思弁) というのが良く分からなかったのですが、シェリングを読み始めたら、彼のデンケン (Denken:思考) がぴたっときたというところからであったと思います。ただ、シェリングからペーメへいってしまって、長いことペーメの中でもがいて、ようやくちょっと出られたなと思っている状況の中で、今はもう一度またシェリングを見直そうかという段階にあります。それで、ペーメのテオゾフィー (Theosophie:神智学) と、今日お聞きしました永井先生と小野先生の話というのは、かなり同じような内容だと思います。ただ、シェリングの場合は、そういうテオゾフィーシュなデンケンというのを、どういうふうに哲学するかってというのが一番大きな課題ではなかったかと思えます。

確かに永井先生と小野先生がまとめられたようなシェリングの Weltalter 理解はあると思いますが、ただあれは単なる草稿であって、僕はそれが未完であった、完成しなかったというところが一番気になる場所なんですよ。それについて、実は先ほどは要領悪くて発表が長くな

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

って、僕原稿（本別冊）の83ページのところを、本当はここをメインに今回はやるべきだったと思います。要するにですね、結局 *Weltalter* の構想というのは、やはりシェリング哲学の形而上学的総括を企図するものであったと思います。その草稿の最初の部分にですね、「根源存在者の展開の歴史」として「真の体系」構築を目指すものだとということが書かれています。で、その後、「過去・現在・未来」にわたって記述するはずのものであったわけですね。ところが、私はその、シュレーターが出しました三つの草稿しか読んでないんですけども、いずれも、過去篇で途絶してしまっているというところですね。なぜそれが、「過去」で途絶してしまっただのかという、確かに、永井先生も発表されていましたが、「現在」へ出るところをですね、「神の子の誕生」みたいな形で書いているところはある、予告として書いているところあるんですけど、結局そこへ到ってないんですよ。そこが問題だと思っています。

そこにまあ特に、シェリングの場合、その問題は結局「学」以前の問題になると思っています。その問題は、原稿（本別冊）の91ページの終わりの2段落目3段落目のところなんですけど、「神の決断」という言葉に集約されると思うんですね。「神の決断」という言葉が出てしまえばですね、それはもう哲学に関わる問題ではないんですね。「神の意志」だとか「神の決断」というようなことはですね。確かに「根源存在者」に関して、シェリングは「神」ではなくて *Ueber=Gottheit* とか述べていますね。それから今日はですね、お二方は特に「収縮」の形でお話しをされたんですけども、シェリングの場合は、やっぱり *Der Wille, der nichts will.* ですね。「収縮する意志」の前って言ったらいいか、「何も意欲しない意志」というそういう立場が出ている。「収縮」のみならず「拡張」も、その「何も意欲しない意志」の中での出来事であるというふうに言えるとは思いますが、そのレベルの議論はですね、やはり「学的必然性」においては書けなかったといいますが、結局「根源存在者」が「現在」へと踏み出す「学的必然性」っていうものがどうしても書けなかった。そこが、挫折しているところじゃないかと思うわけですね。だからその、92ページの上から3行目にありますけども、「根源存在者の展開の歴史」として「学的体系」を構築する「学」のあり方そのものに対するシェリング自身の葛藤があるんじゃないかということです。だからそれが、「学以前のもの」への関わりを開く「脱我的経験」について、そういうことも、やはり序文だけですね、三つの草稿が重なっているところなんで、そのいずれもですね、「学」のあり方の問題を書いているわけですね。

で、やはりそこに最終的に出てくるのは、エクスターゼ (*Ekstase* : 脱我) につながるような「超世界的原理」への転置 (*versetzen* という言葉、*Versetzung* という言葉を使ってみましたけどもね)、そこへの「置き換え」という、そういう問題を取り上げているわけですね。だから、そのへんの問題っていうのをずっと考えてですね、確かに、パーメなんかの展開、テオゾーフィッシュな展開というのはですね、今日のイブシ=Aラービーのお話を聞いて、本当に同じ

ような内容のものだというふうなことは、感じたんですが、ペーメの場合も、そういうテオゾーフイシュな展開と同時に、非常にこう神秘主義的な体験の話が出てくる。それはやはり、この「脱我」の話になってくるわけですね。テオゾーフイシュな展開をする、それをなしうる出発点に、その「靈的経験」というのが出てくるわけなんです。そのへんのところで、シェリングの哲学の根本的葛藤っていうのがあるんじゃないかと、そういう具合に思っているところです。あと 92 ページのそこ、ちょっと大きな枠で書いてありますが、まあこういう、特にシェリング哲学の固有性っていうのは、「宗教の次元に属するもの」との葛藤というふうに言えるんじゃないかと。それが、特に Weltalter の中で、顕著に表れているのではないかと。すいません、ちょっと長くなりました。

**長島** はい。それでは、永井先生。

**永井** そうですね、シェリングについては、お二方のご指摘があったようにこんな簡単なものではなく、私の発表はルリアのカバラーとの違いを際立たせるために非常に図式的に話しました。シェリングのことはまったく勉強不足で、長島さんと読書会をやっているくらいで、まだまだ勉強が足りないんですけども。きょうお話をしたのは、見込みというか、受肉、文字と受肉というところですね。そこで、やはり還元不能なその断絶があるのではないかという、一方ではですね。それから哲学、さつき先生がおっしゃったような、その学的必然性と、学問にしていこうというところに、これはどうしても学問にはならない世界ですよね。ですから、それを学問にしようとした時に、これは最初から挫折が運命づけられているわけで。その問題ですよ。だからそういう、学問の中に入らないような元の原体験みたいなところを構造化していくと、ルリアだとまあこういう型になるんじゃないかなという気がしました。だから、シェリングが物語としての哲学という時に、その物語ということだけを使ってルリアはやっていくわけですよ。シェリングの場合は、そこを哲学にしていこうけれども。物語という点に関しては、恐らくルリアのようなやり方というのは一つのモデルなんじゃないかと思えますね。

あとは、時間がなくて言えなかったんですけども、ルリアだけじゃなく、要するにカバラー的経験というのは、「動き」の経験なんですよ。ですから、文字と受肉の違いって、かなり乱暴なことを言ったんですけども、受肉が入ってくることによって何か止まってしまうんですよ。世界の実存の中に落ちてきてしまうということがあって。だから要するに、神と世界というこの二つの分け方のモデルでいくと、どうしても封印されてしまう次元があって、僕の考えだと、その間の次元というのが一番大事なんじゃないかというふうに思うのですが。だ

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter*を基盤として」シンポジウム】

から、今日お話しをした解釈学が文字の次元ということで、さつき先生がおっしゃいましたけれども、この文字とか言語というのは、いわゆる哲学、西洋哲学とか西洋の文脈の中で出てくるような言語とはもう本質的に違う。ヘブライ語やアラビア語などセム系の言語というのは非常に特殊な言語構造を持っていますから、これはドイツ語とかフランス語とか英語とかに翻訳できないですよ。ギリシャ語にもラテン語にもできない。そういうセム系言語の特殊性に完全に則っていますから、ヘブライ語から離してしまったらこれはもう違うものになってしまうんですよ。だから、シェリングが哲学の中に導入したという以前に、それを西洋語に翻訳した次元でもうその動きというのは封印されてしまいました。そういう非常に面倒なものですね、カバラというのは。ちょっと長くなるのでこれぐらいにしますけど、また。

**長島** はい。最後に小野さん、どうぞ。

**小野** 私はすでに5分長くしゃべってるんで、あんまりしゃべると申し訳ないんですけど。そうですね、その、無底に関して、つまり私は、無根拠というふうに訳しましたけれども、根拠づけられないものとして、イブン＝アラビーは語っていて、あまり詳しくは言わないんですね。人間の知が及ばないというだけで。それを詳しく論じた近世西洋哲学というのは、もう尊敬に値するというか。アラビア哲学だったら、もうそこは扱わないと言ってしまったところを、まさに主題にしているのがシェリングだというのは、その通りだと思います。イブン＝アラビーの特徴というのは、むしろそれを論理学のほうに持っていった場合と、あるいは、想像論のほうに持っていった場合。想像というのは、イマジネーションのほうに持っていった場合どうなるかというほうに、重さがあるように思います。論理学のほうに持っていくほうは、あまり具体的には書いていなくて、アリストテレス学批判という形を取っていて、アリストテレスであれば、[経験判断の命題のうち] 主体、主語のところにくる存在を、イブン＝アラビーは、あれは特殊存在ではなく、一種の特殊な普遍者、普遍者ではあるけれども、本当に特殊な絶対的に特殊である普遍者というふうに捉えて、もうこれは絶対存在であって、人間は、及びえないものであるけれども、そこに述語づけするという形で、論理学を構想しようとしていたように思います。そこらへんは、もしかしたらシェリングが考えていた新しい哲学とか、新しい論理学の方向につながるんじゃないかな、とは思っています。想像論というのは、プラトンのアイデアが自由な動きをするというところで、それは、先ほど永井先生がおっしゃった、神話的あるいは、物語的な方向性を持っている、持っていて、実際にそういう形で、人間が身体性を持ったまま、そのアイデア世界を、どう体験するかというようなことは、[イブン＝アラビー] たくさん書いて書き残しています。そんなところです。

## 総合討論

**長島** それでは、私のほうから質問させていただいて、徐々にですね、フロアの方からのこのディスカッションへと移っていきたいと思うんですけども、実を言うと、岡村先生が、その？ページで、過去篇で途絶しているというふうにおっしゃっていますね。三つのドルックですね、草稿という、全部過去篇で途絶しているんだと。なぜ、それらが過去篇で途絶してしまったかっていう、ここのところについて、岡村先生はお話しされたわけですけども。歴史というものをですね、まあ前面に出して捉えてった場合に、どうなのだろうか。過去篇で、途絶せざるを得ないのがね、歴史なんではないかなって印象を受けますね。これは要するに、現実へと転換する時に、神の決断というところで現実が始まると。それは、分かるんですね。そして実際、現実には、われわれは生きているわけであって、その現実を正当化するためには、この神の決断に基づく正当性っていうことを明らかにするっていうことですね、Weltalterの書かれてるところですが。未来に関しましては、これ神の決断なのか、あるいは、人間の決断とうか、人間の選択の可能性となるのか。歴史哲学ということ考えた場合に、だいたい歴史の法則性みたいなものを、あの時期は考えていたと思うんですね。ヘーゲルにしろ、シュレーゲルにしろ。これをまあ、そこのところを、ああいう法則性を未来とするならば、そこのところに決断の法則、選択ですよ、未来に関しては。そこのところが、シェリングの場合に、未来に対して開放的であるというか、そこがあるんじゃないかなって感じがするんですよ。だから過去篇で、シェリングは終わらざるを得ないんじゃないかと。選択というのは、かなりの可能性というか、場合によっては偶然的に、選択してくれるわけで。どうなんでしょうかと。いうところを、岡村先生からはじめてお答えいただくという形で。

**岡村** そう、あのちょっと分からないんですが、その「歴史」といわれる場合の「歴史」ですよ。

**長島** はい。

**岡村** どういう「歴史」を考えておられるのか。

**長島** 時間系列における。

**岡村** 「歴史」ですね？

**長島** 歴史です。

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

**岡村** それはでも、この、ここでいわれている「過去」というのは、「永遠の世界の永遠の出来事」だって言っているわけですね。それが、今われわれ人間が「主体的自由」を持って生きている「歴史の世界」にはまだ到っていない。

**長島** 到っていない。

**岡村** それ以前のところで終わってしまっているということなんです。

**長島** ええ。だから、シェリングの定義しているところがどこであるかっていうことと関係あるんですけども、その過去に関しても、われわれは知ることができないんですね。文献とか等々読んでみないとですね。そこのところで、無時間的な形で、現実を正当化する。現実には、シェリングが存在してデンケンしていると。そこのところの正当化するロジックを浮かび上がらせてくる、それが、過去、現在なのかなっていう。ええ。

**岡村** はいはい。だから、そのへんは、序文のところですね。やはり、*Mitwissenschaft* っていうんですけど、「創造を与り知る」というのですね。「過去の最深の夜」まで、われわれ人間は遡源できる可能性を持っているという。ただそのためには、やはり、その「超世界的原理」の中にフェアゼッツェン (*versetzen*: 転置) されなきゃいけない。それをまあ「脱我」の経験だという見方をしているんじゃないかと思うんですね。

**長島** ええ。

**岡村** だから、そこから新たな、ある意味での、まあ、ポジティブな哲学というのを、もう1回考え直す可能性を感じていたんじゃないかというような、そういう、ちょっと、お答えになってないかもしれませんが。そういうふうに考えているわけですけどね。

**長島** 菅原先生どうですか？

**菅原** ああ、同じ質問ですか？ 私の発表では、過去は二通りあって、現在に至って再考される過去と、有史以来にずっと、過去で止まる過去という話と、この両方をまたがらせて書いているということが、結構重要な話だと思ひまして。やっぱり、どっちか一つだとなんか、過去を語ったことにならないっていう含みがあったと思うんですが、それが、分けて考えられるよ

## 総合討論

うに恐らく、消極哲学と積極哲学という時に、移っていくんじゃないかなって印象があるんですね。そしてそれで、過去が改められて、そのまあ消極哲学として扱われるってというような感じだと思うんですね、で、それで、そういうのは未来についての話ってというのが、ちょっと。過去を定立されると、前が開けてくるような話ってというのがあったんですね。で、それが、何なのかちょっと分からないところがあるんですが、恐らく、過去として定立して相関的に現在があるというところで、まあ現在があるわけで、それより先は、ちょっとあるってことが、恐らくそれは、未来だと思うんですね。で、その未来を、ちょっと積極的にはあまり、語ってはいなかったんですが、いわゆる、まあ私、ここまでしか言えないんですけども、また堂々巡りするような時の、きっかけにもなるような未来でもあるんですね。その場合の未来ってというのはですね。で、そこしかうまく、そこしかまあ、Weltalter では、語ってはいなかったって印象があります。で、その未来が、その啓示の哲学でどうなってるかっていうところまでは、ちょっとまだ分からなくて、ただ、啓示というものが Offen で、開けてるって意味からすると、多少、Offenbarung 自体に、未来性に見えるのかなってということまでしか、ちょっと言えないって感じでしょうかね。一応、過去と未来の話としては、そのぐらいしかちょっと今のところは言えません。

**長島** ええと、どうですか？ 永井先生。過去。未来について語るということは、ほぼシェリングの場合には、無理なんじゃないかなって感じがするんですよ。語り始めると、例えばそこから一つの法則性を導き出して、ヘーゲルだったらヘーゲル、自由の展開っていう形で語るということは、あり得ると。ところが、シェリングの場合の、その過去論というのが、結局そういう法則性みたいなのを断念したところにあるんじゃないかなと思ってるんですね。すると、未来に関しては、神の決断、例えば、要するに現在に至るためには、神が現実化するっていう形で、決断しているわけ。ところが、未来に関して、その人間のリアリティ、シェリングの思考のリアリティっていうことをいった場合には、シェリング自身が決断する、あるいは、人間が決断するという形を取らざるを得ない。そうすると、人間が決断するとするならば、歴史の選択肢ってというのが、無数にある。そういう開放性を、シェリングの場合に、シェリングの思考自身がですね、歴史に対しては持っているんじゃないかな。ガチガチの必然性ではなく。それは、未来がこう、いくつもあり得る。

**永井** うん。なるほど。

**長島** うん。そこのところがあるから、ある意味では歴史っていう形で見た場合に、過去しか



## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter*を基盤として」シンポジウム】

語れない。一般的にそれは、あくまでも現在の正当化。自分自身が、存在するっていうことの正当性を明らかにする。そういう議論としてね、語られるだろうなという感じなんですけど。どうでしょう？

**永井** いや、その歴史の問題が問題にならないから。

**長島** なるほどねえ、そうですねえ。

**永井** 歴史は入ってこないですよ。だから、歴史ではないけれど、時間性があるんですよ。時間、いわゆる歴史の中の時間じゃなくて。だから、それがこのテキストを通じた時間なんですよ。だから、そのテキストというのは、本だから目に見える、ヘブライ語の形になっているけれど、だけどそれは、その時間の中で固まっていないので、さっきも言いましたが、読めるけれども理解はされないんですよ。つまり、そこが一番微妙なところで、分かったと思ったら逃げてしまうという。分かってしまったら歴史の中に入りますよ、これは。だけど、分かった途端にもう無限に引いていってしまうという議論ですから、これはまたツィムツム、収縮していくわけです。だから、さっき言ったように、そのヘブライ語の言語構造から考えないと、分からないんですよ。ヘブライ語のテキストは、これは歴史の中に入ってこないですね。だから歴史と、神と歴史の中間の次元でやっていくと。先にも言った文字とかテキストのカバラー経験が起こるのはそこだけです。だから、そういうシェリングの過去、現在、未来という問題は、カバラー、ツィムツムでは、ルリアでは、起こらないんですよ。だから、もう完全に次元が違ってしまいうことで、長島さんへの答えにはなっていないけれど、レベルが違ってしまいうこと。

**岡村** うん。そこを、僕は、「宗教の次元」ということで、言いたいことはまったく重なっていると思います。

**永井** ええ。

**岡村** 永井先生が言われたように、96 ページのですね、その「器の破裂」というところですね、これは要するに、その、ちょっとこの文章の書き方そのものが、なんか解釈者がまだ残っているような書き方をされてますよね。

## 総合討論

**永井** はいはい。

**岡村** これでも、解釈者自身がやっぱり破裂をしてしまうという体験じゃないかと思うんですね。

**永井** そうです。そうです。ええ。

**岡村** そのへんが、やっぱり「脱我」の話と重なるような。それと、まさに今言われたような、その「過去・現在・未来」というのは、そういう歴史観そのものが、まさに Weltalter で、それを考えようとしているのではないかと思うんですけども。人間が、主体的に行動する自由のレベルで考える歴史ではもはやなくなっている。それは、Weltalter の訳語の意味を考えると、ということがありましたけども、やはりそれはもう「存在」の問題になっているんですね。「存在と時間」の問題になっていると思うんですが、そこはまさに、違う次元に入り込んでしまったと。で、それまでの「学としての哲学」では、もはや耐え切れないような問題に入ってしまったということではないかという読みなんですよ。

**永井** うーん。

**岡村** だから、Weltalter は、非常に象徴的な、シェリング哲学がぶつかったですね、一番根本的な問題を表している著作じゃないかというふうに思いますね。

**永井** うーん。まあその、学という時の、その学のあり方がね、やはりこれは基本的には体系構築で。

**岡村** そうです。そうです。

**永井** ええ。で、しかも体系構想をつくっていくためには、例えば言語の意味作用とかそういうものに決定されてしまうので、だから、カバラー的経験を学にする時に、学の意味が問題なんですけれども、哲学にするための言語の手法って、たぶんあるんですよ。それはたぶんベルクソンがやったことだと思います。ベルクソンの哲学というのは本当に哲学かどうか分からないんですけども、少なくともそのドイツ観念論的な学とはまったく違って。

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter*を基盤として」シンポジウム】

**岡村** そうです、はい。

**永井** だから、これを哲学と認めるか認めないかはあると思うんですけど。少なくとも一応、ある程度の論理をつくって哲学の体裁を取らせたのは、たぶんベルクソンではないかなというふうに考えてますね。

**長島** そろそろ、パネラー同士での議論が開始され始めているんですけども。パネラーに対して、何か質問、あるいは議論ありましたらば、出していただけるとよろしいんですが。菅原さん、どうですか？

**菅原** ああ。そうですね、先ほちょっと質問的なことを投げたところがあったんですが、永井先生がおっしゃっていた文字か受肉かって話は、やはり非常にやっぱり大きいなっていう感じはしました。文字は文字なんですけれども、やっぱり受肉のような文字しか考えていなかったってということだと思んですけども、シェリングの場合は。でも、やっぱりユダヤの場合では、違うというか、つまり、破片ですから。つまり、まとまってないわけですよ。

**永井** うん。そうですね。

**菅原** ですから、そこをね、いわゆる文字のイメージが違うってということだと思んですけど、それで、特に永井先生のほうに、ちょっとお聞きしたいような感じがしますけど、いわゆる聖書を理解する時に、よく、ブーフシュターベ (*Buchstabe*: 文字) とガイスト (*Geist*: 精神) っていう言い方をする時に、そのガイストで、まあやるっていうのが、まあ考え方としてありますが、それはやっぱり、ガイストでも駄目なんですかねえ？ ユダヤのほうですと、どうなのかなっていう気がちょっとしたんですけど。

**永井** うーん。いや、ガイストはないですね。

**菅原** ああ、やっぱりないんですね。

**永井** 全然ないです。ええ。だから文字、ブーフシュターベとガイストっていう対立は、まったくないですよ。だから、ガイストでいっても、やっぱり止まってしまうわけですよ。だから、例えばドイツ観念論で、シェリングでもヘーゲルでもやはり「動き」だということなんですけ

## 総合討論

れども、これは、カバラ的経験からすれば「動き」じゃないですよ。対立を媒介して動いていくと。これ、動きじゃないですよ。

菅原 ああ。

永井 止まったものの論理的な動きという、まあ疑似運動というんでしょうね、カバラからすると。だから、文字が成就されるという発想ではなくて、さっきも言いましたけど、文字というのは神の動き、生命ですから。ヘーゲルとかシェリング、あるいはフィヒテが言うレベルではないんですけど。でも別の意味で神は生命ですから、その生命が仮初めに動き止めて形になったものが文字なんですよ。だから、文字というのは、絶対に記号じゃなくて、まさに収縮ですから、無限の凝縮体ですよ。だから記号の反対なんです。だからもう、溢れかえっているわけですよ。で、それが文字という形を一応取っているだけで、それをちょっと突つくと、もうすぐバツと変形していくわけですよ。で、この突つづく作業が解釈なわけです。で、動かしていく。だけど、分かった途端に止まってしまうので、止まった途端にそれは嘘になってしまうわけですよ。だから、またその動きに戻してやらないといけないので。だからカバラのテキスト読みというのは、分からないように読むんですよ。『ゾーハル』とか、ああいうのは解釈学ですけども、要するに分からないために読むという。それがカバラ的な読解なんですよ。だから、分かっちゃうともう止まっちゃうと。それはもう偶像崇拜になってしまうんですよ。

菅原 ああ。

永井 受肉という形で、アイコンとしてキリストが身体をまもって現れたと。この身体をまもったイメージになってしまうと止まってしまうというものなんですよ。逆に、文字のレベルではまだ、文字という形が動きの媒体となることによって動いていくと。解釈者がそれを常に新しく解釈することによって動いていくわけです、神の生命は。だからそういう意味で、人間は、その神の生命に与るわけですよ。だから、その文字という媒体を超えてしまうと、もうこれは別の迷いになってしまっ。つまり、人間のほうで勝手にそのテキストの意味を理解してしまうというのが一方にあって、それから、テキストの意味を踏み越えて、そのテキストの真の意味が分かったと。これもまた迷いなんですよ。だから、その中間で、絶えず文字を読み続けていくというか、新しく読み続けていくことしかない。キリスト教から見ると、それが要するに律法の世界で、だからイエスはそこを批判してその文字を成就させる。約束を成就させるとい

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter*を基盤として」シンポジウム】

うふうにいくんですけれども、律法というとき、そもそも律法が書かれた文字のあり方が、(ユダヤ教とキリスト教では)全然違うんですね。だから、受肉から文字を否定的に見るという発想はもうできないんですよ。これがキリスト教の側でつくった論理で、今日はそれを強調したんですけれども。全然違う経験なんですよ。キリスト教が十字架を持ってきてユダヤ教を成就したという形に持って行ってしまうと、一つのストーリーができるんですけれども。連続した物語に見えるんだけど、実はまったく違う経験がそこで起こっているんじゃないかと僕は考えていましてね。

**長島** その場合、要するにその文字っていうのはね、神の動きの断片だっていうことというわけでしょう？

**永井** うーん。

**長島** すると、その断片に対して、われわれがコミットするっていうことは、要するにそれを捉えるっていうことは、できない。

**永井** できないですよ。

**長島** うん。

**永井** だから、それを読むことしかできない。

**長島** うん。読んで、理解はできないわけですよね？

**永井** 理解できない。うん。

**長島** それはもう断片だから、そこんところは、何となく分かるわけですよ。神の動きですよ。こう動いているっていう。そこんところ、直感するっていう形なのかなあ。

**永井** そうじゃないです。直感じゃないです。メタファーでいうと、愛撫することですね。だから、カバラーって、エロスの行為なんですよ。レヴィナスがエロスの現象学ということをやりますけれども、そこで非常によくカバラーの解釈学のあり方が出ていて、女性を、恋人

## 総合討論

を愛撫するというんですね。カバリストがテキストを読む時は、その愛撫するというメタファーです。愛撫することによって子供が生まれるんだけれども、愛撫することによってその女性が自分の所有物になることはないですよ。愛撫することによって逆に逃げてくということですから。ここで、触れるんだけど隠れてしまうという、そういう非常に分かりにくい事態が起きるんですね。これがカバラー、これはタルムードでもやりますけれど、ユダヤのテキスト読解なんですよ。それが「分かる」というのではなくて、「孕ませる」ということですよ。

**長島** なるほど、はい。それじゃあですね、さらにパネラーの方で何か、他のパネラーで、ご質問ありましたら、出していただけると幸いですけども。どうですか？小野くん。何か。

**小野** 歴史のことに関してですけど、シェリングが生きた時代、時期っていうのは、まさに、歴史学が生まれた時ですよ。近代が生まれてくる当にそのさ中、近代をつくる中で、歴史を考えなきゃいけないような時ですよ。シェリングは、世界年代、世界世代で行おうとしているのは、本当は、そういう歴史性が否定されるような構造を元から持ってる。

**永井** そう。持ってると思うんですよ。

**小野** だからもう、近代がまさに成立する最中に、ポストモダンのこと、やっているんですよ。

**長島** あの時期はその、啓蒙的な歴史から始まって、シェリングが亡くなる頃には、いわゆる実証主義的な、歴史を構想するというとか、ああいう人たちが出てくる時代ですよ。で、その枠を突破するロジックというかな、そのところで、歴史というものをシェリングが考えているだろうという気がするんですね。過去現在未来なんていう形で。その、過去現在未来自身は、そういう啓蒙家、あるいは歴史家、あるいは当時出てきているマルクスあたりですよ。僕なんか、シェリングの現在に向かっているあれが、何というのかな、過去の存在についてのロジックというのが、マルクスが一番近いだろうという気がしているんですよ。マルクス主義じゃなくてね。マルクスって、未来を語らなかつたんじゃないかと思うのですよ。実を言うんですよ、現実の分析だけなのだと思う。ああいう議論の仕方は、シェリングもあるんじゃないかなという印象を受けてるんですよ。未来を語るというのは、意外と簡単に、夢を語るというようなところでしかないですよ。予感するとか、そういう形だったら、あり得ると、シェリングの場合いうわけですよ。一番最初なんです。だから、そういうことを予感できる

## 第2部【哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として】シンポジウム】

っていうことは、でも、それ語れないんですよ。

**岡村** マルクスは、よく分からないんですけど、やっぱり「積極哲学」の出発点にあるのは、やっぱりそういう「歴史」に対する絶望だと思うんですよ。本当に当時は、ヘーゲルなんかは、そういう確信、未来に対する確信があったのかもしれませんが。「歴史の世界」そのものが目的を見失っているという、そういう状況の中ですね、もう何も根拠もなくなる、無目的になって「一切がむなし」というですね。かなりもうニヒリスティックな問いかけの中で、あの有名な、「そもそもなぜ或るものがあるのか、なぜ無ではないのか」という問いを立てているところがあると思うんですね。このへんで、さっき、小野先生が言われたように、ポストモダンっていうんですかねえ、僕は今回の発表では、まあちょっとそこまで射程を延ばすのはどうかと思うんですけども、現代におけるニヒリズムの問題ですね。まあ、キリスト教的西洋形而上学的パラダイムそのものを破っていくんですね。そういうものの萌芽はやっぱりシェリングの中にあるんじゃないかと、それをまあ、*Weltalter* の根本問題でもあったんじゃないかと、そういう予測で読んでいるところがあるんですね。ただ、「積極哲学」の構想が、これは完成をしておりますので、そこがずいぶん、まあ、一応「あるものはあるがままに」という言い方したんですけど、なんかものをですね、プロセスにおいて捉える捉え方とは違うんですね。まったく違う発想というのをしようとして、まあできなかったという。それはやはり、まだ「理性」の媒介機能に対する信頼があったところがあるんじゃないかなというような気がするんですね。ただ、シェリングは、「なぜフェアヌフト（*Vernunft*：理性）はフェアヌフトであってウンフェアヌフト（*Unvernunft*：無理性）ではないのか」という、そういう問いも出していますね。ので、そこのところはですね、小野先生が言ったようなポストモダ的なものにつながる問題を、すでに感じ取っていたというところじゃないかなというような気がするんですけどね。

**長島** ええとですね、質問表にお書きになっていただいた方が、お一人おられるんですが、これは、先ほどちょっと岡村先生が触れられたんですが、この *Weltalter* の訳語の問題ですね、岡村先生は世界時代、永井先生、小野先生は世界世代と訳す。

**永井** いや、*Weltalter* って言いましたよね。

**長島** これですね、菅原先生は訳をされた理由をおっしゃったので、お三方の先生には、なぜその訳を選択されたのか。どうでしょう？

## 総合討論

**永井** いや、僕はだから、もう Weltalter にしたんですよ。分からない。翻訳の仕方。

**長島** 永井さんは訳さないで、原語で Weltalter だと、どうですか？小野くん。

**小野** ガブリエル先生の翻訳をした時は、世界年代にしたんですけどね。今回は気分を変えて、柔軟性を持って。「ヴェルトアルター (Weltalter：世界時代)」って聞くと、すぐに「ツァイトアルター (Zeitalter：時代)」を思い浮かべるんですよ。

**永井** ああ。Zeitalter ね。

**小野** 19世紀はもう、「ツァイトアルター (Zeitalter：時代)」について考えた時代なのに、なぜかシェリングは、突然、「ヴェルトアルター (Weltalter：世界時代)」について考えるっていう、対立では、考えてはいるんですけど。でもこれいろいろな文脈で、どう使われてるかを調べないと、やっぱり訳語の決定は難しいですよ。

**長島** そうですね、Weltalter という言葉は、シェリングだけじゃなくて、フリードリッヒ・シュレーゲル、あれも使っているんですよ。調べると。

**小野** 「ヴェルトガイスト (Weltgeist：世界精神)」が、どう展開していくかってことも、もしかしたら念頭にもあるだろうし。世代でも年代でも、ちょっと難しいです。

**岡村** いや。僕はいつも、なんかベームでもですね、ウングルント (Ungrund) を「無底」と訳してしまって、そのベームが持っている言葉の表現のダイナミクスを、もう固定化して、概念に固定化してしまうっていうふうに批判されてしまうんですけど。なんかしかし、カタカナで言ってしまうとね、それで済んでしまうようなところがあって、その文脈の中に置かれた場合は分かるんですけど、何らかのやっぱり訳語はつけざるを得ないかなとは、いつも思っているんです。先ほど申し上げたように、まあちょっと、そこまで深く考えてこの「世界時代」という訳をつけたわけではないんですけど。まあ単なる、一応ですね、「根源存在者の展開の歴史」というのはゲシヒテ (Geschichte：歴史) と言っているんですよ。そういうものも射程に入れようとしたんですけど、でも、そこらへんの、当時の持っていた歴史観っていいですかね、世界観ていうか、そういうものも崩れるようなところに、踏み込んでしまったというところがあるので、まあ、訳が揺れてる状況ではあります。まあ特に、世界の問題、ザイン (Sein：



## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter* を基盤として」シンポジウム】

存在)の問題とツァイト (Zeit: 時間)の問題を、ハイデガーじゃありませんけども、そういう問題に踏み込んでいるなという気がするんですけども。

**長島** 質問をいただいた方、いかがですか？

**質問者** あ、はい。先ほど質問した理由というのは、先ほど話題にも挙がっておられた、歴史の問題についての、先生方の立場の違いがあるのかなあと思ったので、そうした理由から、つまり、*Weltalter* を、どのように捉えることができるのか。でも、今、議論をずっと聞いていまして、まあそれほど、すごく意味の広い言葉だということは承知しておりましたし、この上で、日本語にするとしたら、で、あえて、どれか一つを選ばなければいけないとしたら、という。

**永井** 歴年と訳す人いますよね？

**菅原** いや私、一時期ありました。それ。

**永井** ああ、そうですか。

**菅原** 世界歴年と訳したことがあって。

**永井** それは、どういう含みなんでしょうか？

**菅原** ですからやはり、流れるっていうのと止まるっていうのと、両方入れるっていうのがあってですね。あと、遍歴とかって訳した人いたんですが、それはちょっと世界が動きすぎる感じがしまして。そこらへんの落ち着き具合が、すごく難しいんですよ。

**永井** ああ。

**菅原** 私も、いわゆる、人がどう訳してるかチェックすることがあって。あと、「の」が入るか入らないかも含めてですね。

**永井** 難しい。

## 総合討論

**菅原** 難しいなと。今のところ、ずっと思ってますけどもね。

**長島** やっぱこれは、今のところ、それぞれの先生がそれぞれに訳して、もしこういう質問が出た場合には、きちっと答えてみるっていう、その繰り返しの中で…じゃないかって気がするんですよね。あとはそのたびごとに、そういう当時の使い方ですよね。もうちょっときちっと見ていく必要があるんじゃないかという感じもするし。

— 他言語への翻訳ってありますか？ 英語とかフランス語とか。

**永井** les âges。

**長島** フランス語が二つあるんですよね。

**永井** âges。les âges でもいいんだけど。両方とも âges ですよ。

**長島** で、英語もあるんですよね。

**小野** 英語も ages。

— ages of the world ですよ。

— age ですよ。

— ちょっとそのまま訳してるだけな。

— そのまま訳してるだけ。

**長島** ちょうどここでしゃべっていただいている方々が、Weltalter だと、Weltalter っていうテキスト自身が、そう読まれていないっていうところあるんですよね。今、岡村先生とか、あと菅原先生、あるいは、何人かの人ですね。名前がパパッと拳がっちゃうような人くらいしか、恐らく、三つあるけども、そのシュレーターが出したものをに入れて、一番最初の土台、基礎資料として三つあるんですよね。息子が入れた第3ドルックっていうやつと、シュレーターが二つ

## 第2部【「哲学と宗教—シェリング *Weltalter*を基盤として」シンポジウム】

入れた、エールステドルック、ツヴァイテドルックっていう、この三つそのものも、恐らく丹念にチェックして読んでるっていうのは、数少ないっていうか、やりづらいテキストですよ。そういうこと自身がね。で、その後、ちょうど小野くんが、今回引用してくれたのは *System der Weltalter* っていう。Weltalter は複数ですよ。それが出まして、そしてその後に、2000年代になって、その *Die Weltalter Fragmente* という、こういう分厚い、分厚いんですよ、あれほんと、ペーパーバックみたいな感じなので、それが出てる。そして、研究がやっと、ホグラーベが80年代に、薄いやつを出したんですけどね。その後、分厚いものが2000年代に「思弁と経験」シリーズから、あの叢書の中で、1冊出てる。そしてさらに、やられてて。そういうので、やっぱりそういう研究者それ自身が、菅原先生なんかも言っていたけど、あれは、読むのでは、読み方があるとかね、そういうところを、やっと、ドイツ語の中でも、計画、いわゆる、そういうものがあるぞっていうところから、出てきて。で、恐らく今、全集を編集しておりますから、その中で、ザントキューラー、プレーメンのザントキューラーグループが、15巻で出すってことを言っているのがあるんですね。メモとかそういう、ノートとか、そういうのを全部やっていて、それが4巻まで出てんですね。で、これが自由論と、この *Weltalter* に関する資料なんですね。そういうことになっていますから、今の段階で、できる限りのことをやっというて、次の世代あたりで、資料はもう全部見れるっていう感じになるんじゃないかなと、っていう感じはするんですね。だから、そういう意味では、今回こういう形でシンポジウムを組んだというのも、ある意味では、日本でも、もうちょっと *Weltalter* を、要するに、どうしてもですね、僕なんかもやっぱ、*Weltalter* についてペーパー書けないところがあるのは、そこなんですよ。勝手なこと言うのは、勝手なことできるんですよ。探していけばね、データベース化して探しちゃってね、ああ、そういうこと言ってるなというところは探せますから。で、それでシェリングにも *Weltalter* が、きちっと解析できているっていう自信は、まったく持ってないですね。そういうやり方しちゃうと。そうすると、うん。だからといって、みんな読まないのではなくて、このへんで頑張っって、もう1回読み返していくという、その運動の出発点になればいいんじゃないかなって感じは、しているんですよ。

**永井** なんか質問ないの？

**質問者** また、質問なんですけど。これは、岡村先生のほう、内容の話なんですけども、言葉のことについてなので、ちょっとあれなんですけど。91ページの中で、上のほう、「おわりにかえて」の前のところで、神性、ドイツ神秘主義の関連についてふれたところで、神性の無というところで、「=無底」っていう形にしてるんですけど、やっぱりこれ、ここは、イコール

## 総合討論

でいいんでしょうか？

**岡村** はい。一応ベーメの本（『無底と戯れ～ヤコブ・ベーメ研究～』）でですね、そのあたりのことを少しは書いたつもりで、まあ、エックハルトの、特に「神性の無」というやつ、その流れの中に明らかにベーメもいるという、まあこれは、西谷〔啓治〕先生の受け売りでもありますけども、そういうふうな感じで捉えてはいます。はい。で、そうですね、そういうことです。

**質問者** そのの、無底とやった時に、ベーメの、他のエックハルトとかとは区別される独自性みたいなところとかが含まれるんですか。

**岡村** はい。まあ、まったくそれは「自由」の問題をめぐってと言って良いと思います。エックハルトも読まれたら分かりますが、彼は非常に思弁的な要素が強いですけれども、ベーメの場合は、「自由意志」の問題っていいですかね、そこんところを、かなり踏み込んでいて、このウングルトという概念に至ったんじゃないかという具合に思っていますから、そのところもまたベーメの本で一応書いてありますので。

**長島** それでは、予定時間になってしまいましたので、ありがとうございます。これまでの経緯ですが、マルクス・ガブリエル先生の講演会を、さきほども言いましたように12月にやりました<sup>2</sup>、今回このシンポジウムをやって、報告書を、この取り組みの最初の報告として、刊行することにしたいと。ぜひ、期待していただけると幸いかなと思っておりますので。じゃあ、どうも、終わらせていただきます。

(了)

---

<sup>2</sup> 【注】本別冊第一部を参照。